

1

私わたしが生まれうたラメチャブむらという村は、ネパールの山やまの中なかにあります。村むらのまわりは、上うへも下したも横よこも森もりになっていて、となりの村むらまでは森もりの中なかを1時間じかんほど歩あるかなければいけません。村むらの中なかは、だんだん畑ばたけが広ひろがり、ぽつんぽつんと家いえが25軒けんほど建たっています。どの家いえも屋根やねはわら、かべは土つちと石いしでできています。水道すいどうも電気でんきも時計とけいもありません。

私わたしはこの村むらで12才さいごろまですごしました。そして、そのほとんどは、おじいちゃんいえの家いえでくらししました。おじいちゃんいえの家いえは、そこから両親りょうしんの家いえの屋根やねが見みえるくらい近ちかくにあり、毎日まいにち家族かぞくに会あっていました。なぜ私わたしがおじいちゃんいえの家いえに預あずけられたのか周まわりの人ひとに聞きいたことはありませんが、私わたしの両親りょうしんは子こ供どもが多おほくて、私わたし

1才さいの時ときには5番目ばんめの赤ちゃんあかが生まれう、そのあとも次々つぎつぎと出産しゅっさんして大変たいへんだったからでしょう。全部ぜんぶで10人にんの子供こどもを出産しゅっさんし、3人にんの子供こどもが死しんでいます。2人ふたりははしかで、1人ひとりは水ぼうそうみずでした。

おじいちゃんの家いえには、おばあちゃんやおじさん、おばさん(お父さんとうの弟おとうとと妹いもうと)も住んでいました。その大人おとなたちにまじって、私わたしは小さいちいころから働はたらいていました。

朝あさは、小鳥ことりやにわたりの声こえで目めをさまし、起きるとすぐに牛うし、羊ひつじ、やぎや水牛すいぎゅう、にわたりの小屋こやをそうじし、エサをやったりおちちをしぼったりします。また、村むらのあちこちにある湧き水わきみずまで、水みずくみに行きいます。水みずを入いれたつぼをお負いいかごいに入れて運はこぶのです。負おいかごは、竹たけであんだもので、ひもを頭あたまにかけて背せ負おいます。

大人おとなが畑はたけ仕事しごとに行く時いは、近くちかの子供こどもたちといっしょに動物どうぶつたちを野原のほらにつれていきます。私わたし

は、羊とやぎを30匹、牛を10頭ほどつれて  
いってました。5人から10人の子供たちといっ  
しょに行ってましたが、その子たちも自分の家の  
動物をつれてきていたので、動物の数は全部です  
ごい数になりました。どれくらいいたかは分りま  
せんが、後から見ると先のほうが見えないぐらい  
でした。これらの動物の前と後にそれぞれ子供  
と犬がつき、山道を歩き、川をわたって、野原に出  
ます。野原はいくつもあり、前の日の帰りに、明日  
どこに行くかを決めておくのです。ひとつの野原  
ばかり行っていると、動物が食べる草も、子供が  
食べる木の実もなくなるし、動物も子供もあきて  
しまうので、日によって行く野原をかえていまし  
た。

日がしずむころ、動物をつれて家にもどってき  
ます。それまで、動物たちに草を食べさせ、私  
はバナナ、パイナップル、マンゴを食べて草の上で  
昼寝をしていました。のどがかわいたら、牛のお

ちちを葉っぱで作ったコップにしばって飲んでい  
ました。動物たちは、おなかがいっぱいになると、  
あっちからもこっちからも顔をなめにきて私を  
起こします。

大人たちもあたりがうす暗くなると、畑仕事  
を終えて家にもどってきます。それから晩ごはん  
の用意です。誰が何の役目とか決まってません。  
手があいていたら自分で用事をみつけ、とにかく  
みんなで料理します。時々塩やさとう、マサラ(カ  
レーに使う香辛料)などの調味料や米、野菜な  
どが足りずに近所にもらいに行くことも、またあ  
げることもあります。やぎや水牛を食べる時は、  
一軒の家では食べきれないので、何軒かの家でい  
っしょに食べたりします。

また自分の家のにわとりがまだ小さいと、とな  
りの家から大きいのをもらって料理することあ  
ります。その時には、自分の家のにわとりを大き  
くしてから、相手に返すのです。ごはんが終わる

と、ランプやローソクの下で、大人たちはお酒を  
飲したみながらおしゃべりし、子供たちは石で遊おとなんだ  
り、葉いしっぱで小鳥あそやからす、ひこうきを作つったり  
して遊あそびました。

畑 仕事がない期間は、夜になると、大人たち  
は酒はたけしごとを持ちよきかんって、誰よるかれの家おとなや軒先いえでおしゃ  
べりを楽しのきさきむことが多だれかったです。酒いえが回のきさきって  
くると、大人たちは太鼓たのをたおいたり歌さけったりし  
て、子供たちはその周まわりでおどおとなったりしていまし  
た。

そのころラメチャプにはアメリカからきたボラ  
ンティアの人ひとたちがいて、つり橋つりばしをかけたり生活せいかつ  
のこまったことをたすけたりしていました。おじ  
いちゃんの家いえのそばこの小屋やにもアメリカ人じんの夫婦ふうふ  
が住すんでいて、よくお話おはなしにきていました。私わたしが歌うた  
ったりおどったりすると おこずかいをくれまし  
た。おくさんはお母かあさんが、もう子供こどもを産うみたく  
ないと言いったら 飲のみぐすりのをくれたりする人ひとで

した。

空がすごく晴れている時は、星がきらきら光り、  
流れ星がじゃんじゃんぶって来るんです。おじい  
ちゃんに「どうして星が落ちて来るの」と聞くと、  
「星がうんこしたんだよ」と答えました。それで、  
「星のうんこってどんなの」と聞くと、「星みた  
いにきれいだよ」と教えてくれました。あくる日、  
子供たちが、みんな集まって、星のうんこをさが  
しに行きました。いくらさがしても星のうんこは  
みつきりません。でも、かわいい、きらきら光っ  
ている石をみつけて持って帰ると、おじいちゃん  
は、「これが、星のうんこかもしれないよ」と言  
ってました。ついでに言うと私の名前「タラ」  
はネパール語で星を言います。

流れ星のほかにも、おじいちゃんは、いつどん  
なことを聞いても、子供がなるほどなと思うよう  
な答えをパツと言ってくれました。

「昔々人間はどうやってできたの。お父さ

んもお母さんもなかったでしょ」と聞くと、「に  
わとりのウンチと、木をもやした灰を丸めて神様  
が人間のかたちを作り、『モノケ』とよぶと、そ  
れが『ハイ』と返事をして人間になったんだ。だ  
から、人間が死んでもやしたら、灰になるだろ」

5才の妹が病気で死んだ時、私が「かわい  
そうに」と泣いていると、「かわいそうじゃない  
よ、神様のもとにいるから。神様は、かわいい子  
やかしこ子をほしがると。お前の妹は、か  
わいくてかしこかったから、神様は早くほしがっ  
たんだ」と言ってくれました。私がさらに、「妹  
ひとりじゃ、さびしいでしょ、私もいっしょに行  
きたい。神様は私をつれていかないの」と言う  
と、「そうさ、お前はかわいくもかしこくもない  
から、おじいちゃんとずっといようね」と言いま  
した。

私のもう一人のおじいちゃん、お母さんのお父  
さんは、私が生まれる前に死んでいましたが、

トラをつかまえる名人めいじんだったそうです。2つのオリつくを作って、ひとつには羊ひつじを入れておき、それを食べたにもうひとつのオリはいにトラが入った時ときにフタをしめてつかまえるんだそうです。

このおじいちゃんの村むらは、ラメチャブから歩あるいて丸一日まるいちにちかかるところにあります。ラメチャブのまわりの森もりにもトラは住すんでいます。私わたしもトラに出でくわしたことがあります。でも、私わたしはぜんぜんこわくなかった。

動物どうぶつはみんな、私わたしの友だちともみたいだったので、牛うしややぎおもみたいに思い、「こっちにおいで」とか言いいました。その時とき、誰だれかが私わたしの名前なまえを呼よぶ声こえがして、トラはどこかへ行いってくれたけど、その声こえがしなかったら、私わたしは食たべられていたかも知しれません。

また、山やまの岩いわの下したで4匹ひきの子ネコこをみつけ家いえからエサもを持っていったことがあります。でも、しばらくすると、体からだも大きくなり、顔かおもこわく

なってきました。また、ミルクを飲まなくなり、  
にわとりや羊の肉を一番喜んで食べるようにな  
りました。おじいちゃんに「ネコは肉を食べるの」  
と聞くと、「食べはするけど、そんなに食べない  
よ。ネコが一番好きなのはミルクだよ」と言いま  
す。私はその時、自分がトラを大きくしていた  
ことに初めて気づきました。それからはお母さん  
トラが来たらこわいので行けませんでした。トラ  
とりにつかまって、お母さんがいないのかも知れ  
ないと思うとかわいそうでしたが、子供のトラま  
で殺されないように誰にも話しませんでした。

小さいころは、電気もない村の生活はきらいで  
した。でも、日本の子供たちを見ていると、自分  
は恵まれていたのかな、と思うことがあります。

私の2人の娘たちは小学校から帰っても遊べ  
る所がほとんどなく、何時間も娘たちが外で遊  
んでいると私も心配になって見に行ってしまう  
ます。私の子供の時は、朝から晩まで、大人か

ら注意されることもなく、泥だらけになって自然  
ちゅうい どろ しぜん  
の中をかけまわっていました。私は、日本の子供  
なか わたし にほん こども  
たちよりもっと自由でした。  
じゆう

それでも、私は今でもざんねんなことがあります。  
わたし いま  
ます。学校に行けなかったことです。学校に行く  
がっこう い がっこう い  
には歩いて2時間もかかり、山をこえ川をわたら  
ある じかん やま がわ  
なければいけません。私は、それでも学校に行  
わたし がっこう い  
きたかったのです。

おじいちゃんは、お医者さんみたいな人で、草  
いしや ひと くさ  
を使って薬を作り、村の人を治していました。  
つか くすり つく むら ひと なお  
とても忙しかったので、家にいる時間は少な  
いそが いえ じかん すく  
かったです。病人やケガ人が出た家からおむかえ  
びょうにん にん で いえ  
の人がくると出かけていきます。夜には、ランプ  
ひと で よる  
をつけて、まっ暗な山道を歩いて行きます。おじ  
まっくら やまみち ある い  
いちゃんは周りの人からそんけいされていて、今  
まわ ひと いま  
でも「バッドウル(おじいちゃんの名前)のまご」  
なまえ  
というと、村の人は誰でも私が誰か分ってくれ  
むら ひと だれ わたし だれ わか

ます。また、何日もつづく大きなまつりの時には  
なんにち おお とき  
あっちの家からもこっちの家からも、ごちそうの  
いえ いえ  
しょうたいをうけ、そんな時には、必ず、おじ  
とき かなら  
いちゃんは小さな私をつれて行ってくれました。  
ちい わたし い  
そのおじいちゃんがよく、「自分が死んだら、村  
じぶん し むら  
の子供たちはどうなるのか」と言っていました。だ  
こども い  
から、私も勉強しておじいちゃんみたいになり  
わたし べんきょう  
たいと思っていたのです。  
おも

でも、おばあちゃんとおばさんは、私が学校  
わたし がっこう  
へ行くのに反対しました。畑仕事や動物たちの  
い はんたい はたけしごと どうぶつ  
世話が忙しくなるからです。  
せ わ いそが

おじいちゃんは私にやさしくて、自分がやり  
わたし じぶん  
たいと思うことをやりなさいと言ってくれまし  
おも い  
た。おばあちゃんは私をきびしくしつけ、自分  
わたし じぶん  
もきまりをまもりました。ごはんも一番あとで食  
いちばん た  
べました。おばさんも私のつまみぐいをみつけ  
わたし  
ると、その食べものを全部すててしまうほどでし  
た た ぜんぶ  
た。やんちゃだった私はよくしかられるので、  
わたし

そんなきまりがおもしろくありませんでした。

どうしても学校へ行きたかった私は、動物たちをつれて野原についてから、その番を犬にまかせて家にはないしよで学校にかようことにしました。

学校も村の家と同じつくりで、屋根はわら、かべは土と石でできています。細長い教室がひとつあるきりで、その中で学年に分かれて勉強します。生徒たちはみんな家にいる時と同じ服そうです。私みたいな小さな女の子は下着のパンツなんかはいていませんでした。そして、教室で勉強するよりも、外でボールとかで遊んだりするほうがずっと多かったです。教室で勉強する時は、机やイスはないので、地面にすわってしました。みんなノートではなく、小さな黒板を使っていました。

ただ、みんなは私とちがい、かばんとおべんとうを持っていました。おべんとうの時には、

先生のそばに行って、「家にはないしょできたか  
せんせい い いえ  
ら、おべんとうがないの」と話すと、先生はみんな  
はな せんせい  
なに「タラがおべんとうないって、分けてやって」  
わ  
と言うのです。先生はくいしんぼうだから、くれ  
い せんせい  
ません。でも、みんなが少しずつくれるので、み  
すこ  
んなよりおべんとうが多くなりました。だから  
おお  
半分は、動物をまもってくれている犬にあげまし  
はんぶん どうぶつ いぬ  
た。

学校に行ってひと月たったころ、先生は学校に  
がっこう い つき せんせい がっこう  
行けるよう家に説とくに来てくれたのですが、お  
い いえ せつとく き  
ばあちゃんとおばさんに逆に説とくされて、  
ぎゃく せつとく  
「学校をあきらめなさい」と私に言いました。  
がっこう わたし い  
それから、私は毎日、くやしくて泣いてばかり  
わたし まいにち な  
いましたが、そのうち、しょうがないとあきらめ  
るようになりました。村の男の子はほとんど学校  
むら おとこのこ がっこう  
に通っていましたが、女の子のほとんどは、「学校  
かよ おんなのこ がっこう  
は必要ない」と言われて通ってませんでした。  
ひつよう い かよ  
男の子は大きくなったら手紙や書るいを読めなく  
おとこのこ おお てがみ しょるい よ

てはこまるだろう。女の子はおよめさんに行って、  
だんなさんに読んでもらえばいい。そんな考え  
があったのでしょう。でも、私の周りの大人だ  
けを見てのことですが、男のほうが女よりえら  
いとかいった考えはあまりなかったように思い  
ます。

そういえば、ある時、子供たちの間で、男と  
女のどっちがえらいのかと言いあったことがあ  
ります。負けそうになった男の子たちがやけくそ  
になって、「オシッコが遠くへとばせるから、男  
のほうがえらいんだ」と言い出しました。そこで、  
オシッコのとばしっこをしたんですが、私たち  
女の子が勝ってしまったんです。

10才のころ、おばあちゃんが死んで、私は  
両親の家にもどりました。

お母さんは9才の時に結婚し、16才で初めて  
出産してから40才ぐらいまでの間に10人の

子供を産みました。家の用事のほか、産ばさんの  
こども う いえ ようじ さんば  
仕事もしていました。毎日の畑仕事を終えてつ  
しごと まいにち はたけしごと お  
かれた体を休ませるひまもなく、赤ちゃんにお  
からだ やす あか  
っぱいを飲ませます。また、村で出産がある時  
の むら しゅっさん とき  
には、その家の人呼びに来るのですが、晩ごは  
いえ ひと よ く ばん  
んを食べずに出かけ、朝になってようやく帰って  
た で あさ かえ  
くることもあります。そして、その日も畑仕事  
ひ はたけしごと  
に行きます。

そんな忙しいお母さんにかわって、私は家の  
いそが かあ わたし いえ  
用事を一生けんめいしようと思いました。お母  
ようじ いっしょう おも かあ  
さんの喜ぶ顔を見たからです。でも思う  
よろこ かお み おも  
ようにいきません。この家で私は、動物たちで  
いえ わたし どうぶつ  
なく、小さな子供たちの世話をしていたからです。  
ちい こども せ わ  
大きなお兄さん夫婦もいっしょに住んでいたの  
おお にい ふうふう す  
で、その赤ちゃんも小さな妹たちと同じように  
あか ちい いもうと おな  
見なければなりません。動物たちとちがい、子供  
み どうぶつ こども  
たちは目がはなせません。きたない物を口に入れ  
め もの くち い  
たり、あぶないことをしたり、家の中でうんこを  
いえ なか

したりするからです。そして、お兄さんにいの子こをし  
かると、お兄さんにい夫婦ふうふに「こんなちい小さいこ子こをし  
か  
って」などとおこられることもありました。その  
お兄さんにいの子こと同じ日ひに生まれた妹いもうとが病びょう気きで死し  
んでからは、時々ときどきその子こと妹いもうととがダブみって見え  
「死しんだ妹いもうとも生いきてたら、この子こと同じおなように  
こんなことかんがをしてたんだらうな」と考かんがえるよう  
になって、その子この世せ話わをするのがつらくなって  
きました。

また、この家いえに住すむようになってから、お父とうさ  
んが「村むらの人ひとが、お前おまえをお嫁よめにもらいた  
い  
て、どう思おもう」と結けっ婚こん話ばなしをもってくるようにな  
りました。まだ小ちいさかっただけで結けっ婚こんなんても考かんが  
えてなかつたし、親おやの決きめた、しかも知しりもしない  
人ひととは結けっ婚こんしたくなかつたので、そんな話ばなしは聞き  
きたくありませんでした。

私わたしは、早はやくこの家いえを出でたいな、と考かんがえるよう  
になりました。

2

私が十二才の夏のことです。ある日の夕方、  
わたし さい なつ ひ ゆうがた  
3つ年上の男の子が家族やしんせきの人といっし  
みつつとしうえ おとこのこ かぞく ひと  
よに家にやってきて、私に結婚を申し込むので  
いえ わたし けっこん もうしこ  
す。これまでの結婚話とはちがっていました。  
けっこんばなし

私の父親とその男の子の親とで、来る前に二人  
わたし ちちおや おとこのこ おや く まえ ふたり  
の結婚を決めていたのです。私の気持ちを聞く  
けっこん き わたし き も き  
こともしませんでした。このままだと、明日には、  
あす  
その男の子の所にとついで行かなければいけな  
おとこのこ ところ い  
いようすでした。近所の人が集まって私をむか  
きんじょ ひと あつ わたし  
えに来る人のごちそうを作りだしました。  
く ひと つく

私は、ひと晩中考えました。親の言うとお  
わたし ばんぢゅうかんが おや い  
りに結婚すれば、この家を出ていける。でも私  
けっこん いえ で わたし  
のお姉さんをはじめ、親が決めた結婚をした人は、  
ねえ おや き けっこん ひと  
そんなに幸せでないみたいでした。お姉さんの  
しあわ ねえ  
場合だと、結婚式の10日前に結婚を知らされ、  
ばあい けっこんしき と う かまえ けっこん し  
式の当日になって初めて相手の顔を見たんです。  
しき とうじつ はじ あいて かお み  
お姉さんは、しょっちゅう実家にもどって来てい  
ねえ じっか き

ました。村の中に好きな人がいたのに、お兄さん  
むら なか す ひと にい  
のおよめさんが来た家へ、親の決めた娘 どうし  
き いえ おや き むすめ  
のとりかえで行ったのです。親が決めた結婚をし  
い おや き けっこん  
た女の人の中には、崖から飛び降りて自殺す  
おんな ひと がけ と び お じさつ  
る人もいました。その反対に、すごく少なかった  
ひと はんたい すく  
けれど、自分からのぞんで結婚した人はそこそこ  
じぶん けっこん ひと  
幸せに見えました。私の知っている夫婦は、周  
しあわ み わたし し ふうふう まわ  
りの反対を押し切って結婚したために、一時期森  
はんたい お し き けっこん いちじきもり  
の中で住んだりして苦労していましたが、仲良く  
なか す くらう なかよ  
くらしていました。それぐらい親の決めた結婚を  
おや き けっこん  
ことわることはむずかしいのです。私の姉も妹  
わたし あね いもうと  
もみんな親の決めた結婚をしました。

私は逃げ出すことにしました。行き先は、カ  
わたし に げ だ いきさき  
トマンズに住む小さなお兄さんの所です。着替  
す ちい にい ところ き が  
え、ローティ（小麦粉で作ったパン）を布かばん  
こむぎこ つく ぬの  
に入れ、水とうと10ルビーのお金を持って、み  
い すい かね も  
んながねしずまっているなかをそろりそろりと、

音をたてないようにサンダルも手に持って家を出ま  
おと て も いえ で  
した。顔を見られないように布をかぶりしました。  
かお み ぬの  
もうすぐ朝かなと思っていましたが、夜明けまで  
あさ おも よ あ  
は遠かったです。暗い森の中をずんずん歩いてい  
とお くら もり なか ある  
ったけど、なかなか空は明るくなりません。今か  
そら あか いま  
ら考えると、トラによくおそわれなかったなあ、  
かんが  
と思います。夜が明けてくると、「家の人<sup>いえ ひと</sup>が追  
おも よる あ いえ ひと お  
かけてくるかな」という心配もなくなり、「これ  
しんぱい  
で大丈夫<sup>だいじょうぶ</sup>」と思うようになりました。その日は、日  
ひ ひ  
がしずむ前<sup>まえ</sup>についた山小屋<sup>やまごや</sup>にとまることにしまし  
た。つかれていたのでしょう、ぐっすりねむり、起  
お  
きたのはお日さまの光<sup>ひかり</sup>が強くなってからでした。  
ひ ひかり つよ

そこから数時間<sup>すうじかん</sup>歩いて、バス停<sup>ある</sup>のあるドラガル  
ばすてい  
についたのはお昼<sup>ひる</sup>ごろです。どのバスにのってい  
いかも分からず、体<sup>からだ</sup>もつかれていたの<sup>かわら</sup>で河原<sup>やす</sup>で休  
わ  
んでいると、きっと心配<sup>しんぱい</sup>してくれたの<sup>かわら</sup>でしょう、  
せんたく ちか  
洗<sup>せんたく</sup>たくにやってきていた近く<sup>ちか</sup>のおばさんが「どう  
したの<sup>こえ</sup>」と声をかけてくれました。「カトマンズ

にいるお兄さんに会いに行くの」と答えました。

話をしていると、そのおばあさんは、ドラガルにお嫁にきた私のいとこも知っていました。その日の夜は、おばさんが家にとめてくれ、料理もごちそうしてくれました。次の朝、おばさんは、知り合いのバスの運転手に「この子のことたのんだよ。お金はあんまり持ってないからね」と言ってくれました。バスに半日ゆられ、やっとカトマンズにつきました。バスの運転手は、私からお金を受け取りませんでした。

カトマンズはネパールで一番大きな街です。

いなかにはない物がたくさんあり、夜でも電気がついて昼のように明るく、初めて来た時にはびっくりしたものです。

小さいお兄さんは、この街でホテルの車の運転手をしていました。このお兄さんは、私より4才年上で、7才のころに家出して、それから

は、住み込みで皿洗いやにわたりのエサやりの  
す み こ さらあら  
仕事をしたり、リキシャ（輪タク）の仕事などを  
しごと りん しごと  
して一人で生活してきていました。家出してしば  
ひとり せいかつ いえで  
らくは、生きてるものやら、トラに食べられるか、  
い た  
崖から落ちて死んだものかも分かりませんでした  
がけ お し わ  
た。その後村の人がたまたま出あって、無事でい  
ごむら ひと で あ ぶじ  
ることが分かりました。そのお兄さんが初めて家  
わ にい はじ いえ  
にもどってきた時の服そうは、今でも覚えていま  
とき ふく いま おぼ  
す。サングラスをかけ、時計をはめて、水玉もよ  
とけい みずたま  
うのシャツ、黒いパンツというものでした。その  
くろ  
時は、村で一番かっこよく見えたものでした。  
とき むら いちばん み

そのお兄さんのカトマンズのアパートを3日か  
にい みっか  
かってさがしてころがりこんだ私は、その後お兄  
わたし ご にい  
さんが働いているホテルで仕事をはじめました。  
はたら しごと  
お客さんはもちろんオーナーやいっしょに働く  
きやく はたら  
人たちの食事、そうじ、買い物が私のおもな仕事  
ひと しょくじ かいもの わたし しごと  
です。お客さんは、海外からのツーリストがほ  
きやく かいがい  
とんどです。ネパールには高い山がたくさんある  
たか やま

ので、それらを見に來たり、山歩きに來たりして  
み き やまある き  
いました。そのほか、外国のボランティアの人た  
がいこく ひと  
ちもいました。

もちろん、私はえい語がぜんぜん話せません  
わたし えいご はな  
でした。だから、「ニューズペーパー」と「ペッ  
パー」とをまちがってしまって、コショウをお客  
きやく  
さんに持っていったり、「フライデー」と「フラ  
イドエッグ」をまちがえて目玉やきを料理したこ  
めだま りょうり  
ともあります。お客さんも笑っていたけども、  
きやく わら  
私も何のことが分からないまま、いっしょにな  
わたし なん わ  
って笑っていました。でも自然にえい語が話せる  
わら しぜん えいご はな  
ようになり、お客さんと話すことも多くなりました  
きやく はな おお  
した。そして、仕事が楽しくなってきました。カ  
しごと たの  
トマーズに出てきてまもなく、やさしかったおじ  
で  
いちゃんが亡くなりました。  
な

そのころは家を逃げ出してきてよかったかな、  
いえ にげだ  
と思ったりしましたが、2年ほどしてお父さんが  
おも ねん どう  
また前の男の人をつれて来て結婚しなさいと言  
まえ おとこ ひと き けっこん い

った時には、ぜったい帰らないとけんかしてこと  
わりました。それから、村での生活にもどる気  
はなくなっていました。

私が19才のころでした。それまでもツーリ  
ストやネパールの男の人から結婚を申し込まれ  
たことがあったのですが、仕事が楽しくて結婚の  
ことなど考えてもいませんでした。それが、  
日本人のツーリストから結婚を申し込まれた時、  
ほんのじょうだんのつもりで「OK」と言ってし  
まったんです。それをこの人が本気にしてしまっ  
て。私は、この人のほうでもじょうだんのつも  
りだろう、とぐらいにしか、その時は思っていま  
せんでした。

ネパールでは、結婚前の男女がいっしょに外を  
歩くことは、周りからよく思われません。だから、  
この人から食事や買い物にさそわれても気がすす  
みませんでした。でも、この人は、ホテルのオー

ナーの息子が日本のビザをとるのに必要な身元ほ  
しょう書を書いてくれることになっていました。  
だから、ことわりきれず、デートしたことがあります。

この人は、オートバイでいろんな国を旅行する  
つもりでいました。「ネパールを出る前にプレゼ  
ントをしたい」と言い、サリーやジーンズなどを  
買ってくれたのですが、私は、あとあとごはん  
を食べるお金がなくなっはこまるだろうと思っ  
て、安物ばかり買ってもらいました。

別の日には、映画にいっしょに行きました。ネ  
パールでは、女の人結婚前に映画をみにいっ  
てはいけないと言われ、それまで女友だちと  
一度行ったきりだったので、その時は喜んで行  
きました。このツーリストといっしょというのが  
うれしいのではなく、映画をみれるというのがう  
れしかったのです。ちなみに最初に行った時など  
は、スクリーンとは反対の後ろのほうを見て、

映画がはじまるのをまっていたものです。

この人は、私が働いていたホテルのとなりの  
ホテルにとまっていたのですが、朝早く、まだほ  
かのツーリストがねている時に、そうじをしてい  
る私を見つけると、となりの屋上から「タラ、  
タラ」と大きな声でよんできます。また、一日中  
ひつつき虫みたいに私のあとをくっついてきま  
す。

そのうちに、この人がかん炎になり、かん病す  
るようになりました。医者からは「死ぬかも知れ  
ない」と言われました。この人がかわいそうに思  
えてきて、水けの多い野菜やフルーツを食べさせ  
たり、ビタミンの粉をとかした水を飲ませたりし  
ました。

かん炎と分かる前、ソファーにならんですわっ  
ていると、この人が急にキスしてきたことがあ  
ります。かん炎と分かって、この人は医者「タ  
ラに病気がうつったかも知れないのでしらべてほ

しい」とたのみました。それを聞いて死ぬほどは  
ずかしかったけど、この人のやさしいところも分  
かってきました。

この人の気持ちが本気だと分かったのは、「き  
みの家族に会いたい」と言ったからです。小さい  
お兄さんに会い、「2年まってください。2年後  
にもどってきます。それまでタラに好きでもない  
人と結婚させないでください」とたのみました。

私もこのころには、結婚してもいいかな、と思  
う気持ちもありました。

でも、私の気持ちはたぶん、まだゆれていた  
のでしょう。この人が、「このままツーリングを  
つづけたほうがいい？ それとも今結婚したほう  
がいい？」と聞きました。私は、今さら「ツ  
ーリングに行って」と言うと、はくじょうに思われ  
る。それにこの人は親が反対してもツーリングに  
きた人だから、私が「ツーリングに行かないで」  
と言っても行くに決まっている。そう思って、「ツ

ーリングに行かないほうがいい」と答えたのに、  
この人は「分かった」と言ってしまったのです。  
私は高い所から地面に落ちたような気持ちにな  
りました。その後この人は、日本の友だちに「ネ  
パールの女の人をつれてかえる」と電話したり、  
私のパスポートを作ったり、お兄さんにたのん  
で結婚するための書るいを作り、ラメチャプまで  
行ってもらったりと、私のまわりでどんどんこ  
とがはこんでいきました。私はとうとうことわ  
るきかいをなくしてしまいました。

こうして結婚したのが今の夫です。気がつい  
たら、いっしょに日本に来ていた、そんなかんじ  
です。今でも「どうして結婚したんだろう。まほ  
うにかけられたみたい」と思います。私に結婚  
を申し込んできた人のなかには、ずっとかっこい  
い人もいたし、この人はおこりんぼうで私より  
14才も年上なのに。私がこの人と結婚するっ  
てことを、神様が私のおでこに、ティカのよう

に書いていたみたいです。  
か

ティカ = 米つぶとか赤い粉をヨーグルトで  
こめ あか こな  
ねったもの。「ティカ」という儀式の日に、人  
ぎしき ひ ひと  
のひたいや部屋や道具などにぬって祝 福し、  
へ や どうぐ しゅくふく  
健康や幸福を祈る。今はプラスチックのも  
けんこう こうふく いの いま  
のが売られている。  
う

3

そうして、日本に来たのが10年前です。日本  
にほん き ねんまえ にほん  
でびっくりしたのは、自動はん売きです。最初、  
じどうはんばいき さいしよ  
お金を入れるとは思ってなかったので、ジュース  
かね い おも  
やビールのボタンを全部おしてみました、何も  
ぜんぶ なに  
出てきません。家へかえって夫に言うと、笑い  
で いえ おっと い わら  
ながら、「自動はん売きもお金があるんだよ」と教  
じどうはんばいき かね おし  
えてくれました。また、銀行のきかいにカードを  
ぎんこう

入れてお金をとり出しているのを見て、いくらで  
い かね とりだ み  
もお金をとり出せるものと思い、「これだから、  
かね とりだ おも  
日本人はお金持ちなんだね」と考えていました。  
にほんじん かねも かんが  
銀行に預けた分しかお金が出てこないことは、夫  
ぎんこう あず ぶん かね で おっと  
といっしょにちょ金しに行って初めて知りまし  
ちよきん い はじ し  
た。

次にびっくりしたのは、人の多さです。電車に  
つぎ ひと おお でんしゃ  
のると、すわるところもなくてぎゅうぎゅうづめ。  
電車をおりると、あっちからもこっちからも人が  
でんしゃ ひと  
ぶつかってきました。その時私は、「私のネパ  
ときわたし わたし  
ールのいなかには、サルがいっぱいいるの。  
日本人てライク・モンキーね」と夫に言いまし  
にほんじん おっと い  
た。夫は、何も言わず、笑っていました。そう  
おっと なに い わら  
いえば、夫のかおも少しサルににているようで  
おっと すこ  
す。

けれども、こんなことにびっくりしてばかりい  
られませんでした。日本の言葉も生活も分からず、  
にほん ことば せいかつ わ  
妊しんしていてつわりもひどく、そして、友だち  
にんしん とも

もおらず、とてもたいへんでした。ネパールでは、  
明るくてやさしかった夫も、日本ではころっと変  
わって、顔がいつもくもった空のようでした。ナ  
イフのような言葉で泣かされることもありまし  
た。あとで思うと、私を受け入れてもらうため  
になやんだり、いらいらしたりしていたからかも  
知れません。

日本語の勉強は、最初は夫に教えてもらった  
んですが、えんぴつで手をたたかれることもあり、  
「勉強って、つらいもんだなあ」と思っていま  
した。

そのあと、夜間中学に通いましたが、家から  
1時間もかかることや、妊しんしていたこともあ  
り、1か月ほどでやめてしまいました。でも先生  
がやさしく、勉強の楽しさを味わうことができ  
ました。そして、ここでひらがなとカタカナを覚  
えました。

2人の娘を出産し、子育てにひと息ついたこ

る、私と同じように日本の男の人と結婚している  
わたし おな にほん おとこ ひと けっこん  
るネパールの友だちに大阪・梅田にある「よみか  
とも おおさか うめだ  
き茶屋」を紹介してもらいました。  
ちゃや しょうかい

ネパールにいる間は、読み書きができなくて  
あいだ よみ か  
もこまることはなかったのに、日本に来てからは  
にほん き  
いっぱいこまりました。ある日、子供が熱を出し  
ひ こども ねつ だ  
て病院につれて行ったのですが、しんさつの  
びょういん い  
申込書にいろいろ書かなくてははいけません。か  
もうしこみしょ か  
んごふさんにたのむと、「子供の生まれた日も書  
こども う ひ か  
けないの」と冷たく言われ、すごく悲しい思いを  
つめ い かな おも  
しました。それで勉強したいと強く思うように  
べんきょう つよ おも  
なっていたのでした。

どの先生も一生けんめいに教えてくださるので  
せんせい いっしょう おし  
で、私も一生けんめい覚えようという気になり  
わたし いっしょう おぼ き  
ます。そして、少しずつでも字を覚えていくから、  
すこ じ おぼ  
よけい楽しくなってきました。家のつごうで休む  
たの いえ やす  
こともありますが、「今日学校に行っていたら、  
きょうがっこう い  
どんな勉強をしてたかなあ」なんて考えます。  
べんきょう かんが

そして日本人に対する見方も、少しずつ変わっ  
てきました。よみかき茶屋に通うようになってし  
ばらくすると、私は上田京子先生に教えてもら  
うようになりました。そして、さっきのかんごふ  
さんのこととか、こちらからあいさつしても  
日本人はあいさつしてくれないことなどを話しま  
した。先生は、「そういう人もいるけれども、そ  
んな人ばかりじゃないよ。これからきっといい人  
に会えるかもよ」と言いました。私は「本当に  
いい人に会えるかな。そんな日本人ているのかな」  
と聞いていました。でも、その後、先生とも親し  
くなり、いろいろななやみとかも聞いてもらったり、  
買い物につきあってもらったりしています。また、  
ネパールなどでボランティアをしているすてきな  
人たちともめぐりあえたり、近くの商店がい  
に買い物に行っても「おい、タラ、買ってくれ」  
と声をかけられたりして、楽しく買い物できるよ  
うになりました。今、私は、「上田先生の言っ

たとおりだったなあ」と思っています。

ただ、「日本人ってかわいそうやな」と思うことがあります。一生けんめい、熱のある時も仕事をして給料をもらっても、家ちんとかに分けていくと、手元に残るのは少しだけ。1週間もすれば、「お金がない、お金がない」と言わなくては行けない。また、そんなに、「お金がない、ない」と言うのに、まだまだ使えるテレビやタンス、服などをほって、新しい物を買ったりしていることです。「どうして、そんなぜいたくができるのかな」と、ふしぎです。

ラメチャプでは、1年の半分ほどは外に出てよく働くけれど、あとの半分はまきを作ったり田畑を耕したりする仕事のあい間は、のんびりと日なたぼっこやおしゃべりを楽しんで、お金も使わずにゆっくりとすごしていました。

3年前にネパールに初めて帰国しました。家族  
ねんまえ はじ きこく かぞく  
 で行ったのですが、子供がまだ小さかったので、  
い こども ちい  
 ラメチャブへはもどれませんでした。

今は、ラメチャブの近くまで道路ができて、  
いま ちか どうろ  
 半日ほど歩けばバスにのれるそうです。私の友  
はんいち ある わたし とも  
 だたちは、お嫁にいたり、町へ働きに出た  
よめ まち はたら で  
 りして、ほとんどいないようです。でも、お兄さ  
にい  
 んに聞くと、村のようすは16年前と変わってい  
き むら ねんまえ か  
 ません。夜空の星もそのままです。相変わらず、  
よぞら ほし あいか  
 毎ばん星がうんこをしているでしょう。私はよ  
まいばんほし わたし  
 く夢をみるのですが、体は日本にいても、夢の中  
ゆめ からだ にほん ゆめ なか  
 の私はいつもラメチャブにいます。私は子供で、  
わたし わたし こども  
 野原で犬とかけまわったり、森の中のくだものを  
のほら いぬ もり なか  
 食べたり、木にもたれてねむったりしています。  
た き  
 毎日の生活のちょっとした時に、家族や友だちの  
まいいち せいかつ とき かぞく とも  
 ことを思い出した日は、必ずそんな夢をみます。  
おもいだ ひ かなら ゆめ

ラメチャブでは、昼は山とか川で、夜は家の近  
ひる やま かわ よる いえ ちか

くの畑はたけにあなをほって うんこをします。おしり  
は水みずであらうんですが、冬の夜ふゆ よるはとてもつめたい  
です。私わたしはいつか、「よみかき茶屋ちゃや」の先生せんせいた  
ちをこの村むらにつれていきたいと思っています。な  
ぜなら、夕日ゆうひや夜空よぞらの星ほしがきれいなためだけでな  
く、先生せんせいたちにもうんこのあとおしりを水みずであら  
ってもらいたいからです。

おわり

本書ほんしょは、第27回部落解放文学賞だい かいぶらく かいほうぶんがくしょうの識字部門しきじぶもんの入選にゅうせん  
作品さくひんです。著者ちよしゃの了承りょうしょうを得て教材化え きょうざい かするにあたり  
「部落解放ぶらく かいほう」2001年489号臨時号ねん ごうりんじごうをもとに、いくつか  
表記ひょうきを変更へんこうし、すべての漢字かんじにふりがなをつけました。

# ネパールの流れ星

著者 タラ セレスタ

---

## 識字・日本語センター

〒556 - 0028

大阪市浪速区久保吉1 - 6 - 12

大阪人権センター3階

電話・FAX 06 - 6561 - 9988

本教材が必要な場合は、識字・日本語センターまでご連絡ください。電話の受付は、平日の午後1時～5時です。送料を負担していただく場合があります。

本教材は、平成13年度文部科学省委嘱「識字・日本語読み書き学習における教材研究事業」の一環として、大阪府教育委員会が発行しました。